

## 厳しい時代を乗り越えて

東京大学 大学院  
工学系研究科 電子工学専攻

教授 中野義昭



新世紀に突入すると同時に始まったアメリカ発のいわゆる「IT不況」が、日本経済を苦しめている。その後の同時多発テロ事件が追い打ちをかける。21世紀は正に波瀾の幕開けとなった。IT革命の担い手であった光・高周波デバイスも、市場の冷え込みの直撃を受け、一昨年までのような勢いは失っている。ただその一方で、デジタル加入者線(DSL)や光ファイバ加入者線(FTTH)など家庭向けブロードバンド回線は着実に普及しつつあり、通信トラフィックは従前の予測どおり増加の一途をたどっている。厳しい時代を生き抜くに当たり、情報ネットワークはむしろ有力なツールとなろう。光・高周波デバイスのニーズは、決して偽物ではない。一昨年までの過剰投資の余波が消えれば、堅実な成長が訪れることは間違いない。今が辛抱のしどころである。しかし、ただ苦境をじっと耐えてやり過ごすばかりがよいとは思えない。この難局を、これまでのやり方を省み、21世紀に歩むべき道を探るチャンスと捉えるべきであろう。

まず第一に、「自己実現」のチャンスと言える。構造改革の嵐の中、「余剰」と決め付けられないように皆が努力している。その際、自分が本当に能力を発揮できる対象は何か、自分が本当にやりたいことは何か、短い人生の中で自己をどのように実現すべきかといった、個人の根源的問題に向き合わざるを得ない。その結果、むしろ現在のポジションにしがみつくとマイナスであるという結論が、自ら導かれることだってある。この難局を通じて、誰もが自己実現=自立の道につくことができれば、むしろ幸せと言える。光・高周波デバイスの研究開発に携わる人は、優れた素子を開発し世界のトップに立つことが面白くてたまらないからやっているはずで、そうである限りますますその能力を磨いていってほしいと思う。

第二に、「豊かさ実現」のチャンスと言える。日本は、経済大国であっても生活大国でないことは長年指摘されて

いるが、高度成長、バブル崩壊、金融不全といった歪んだ経済の浮き沈みに翻弄されて、真剣に対応する機会を逸してきた。居住・通勤環境やプライベート時間の過ごし方など、現在でもまだまだ貧しい。心の豊かさを犠牲にしてまで育てなければならない経済など存在しないという当然のことに気付くチャンスである。暮らしのための経済であって、経済のための暮らしではない。貿易黒字減らしや不況解消を目的とした内需拡大(ガラクタを生産し自然を破壊する!)ではなく、心の豊かさを取り戻すための上質な内需拡大に取り組むべきであろう。この特集の光・高周波デバイス群が、情報通信インフラの整備を通じて、豊かさの実現に多大に貢献するものと信じている。もっとも、架空通信ケーブルの「蜘蛛の巣」状態だけでは何とかしなければいけないが。

第三に、「共生社会へ向けて」のチャンスと捉えたい。市場原理とグローバリゼーションに完全適応すべく昨今の構造改革が進められているが、一方でこの方向を突き詰めることが人々の幸せにつながるとは限らないことも明らかになりつつある。地域経済をグローバル経済と一体化すると、世界の大多数の国は一部の国の支配下に陥り、普通の人々はこつこつ働いても報われない社会に絶望感を抱くようになる。アメリカモデルの経済によって貧困に追い込まれて死んでいく人々に思いを馳せる必要がある。地球上のほとんどの存在(自然や人々)は、むしろ過度の競争やグローバルマネーによる投機から守られなければならない。地球上の存在すべてがバランスを保って共生できる社会へ向けて、市場原理とグローバリゼーションの先にある新たな指導原理を考えるチャンスが与えられたと考えたい。

この特集の光・高周波デバイスによってもたらされる情報ネットワークが、地球システム存続のための深い知恵を世界中に届ける希望の道筋とならんことを切に願うものである。